

神奈川県横浜市

神奈川県庁本庁舎



1928(昭和3)年竣工の神奈川県庁本庁舎は、当時東京市職員だった小尾嘉郎のコンペ1等入選案を基に県内務部が設計した。鉄骨鉄筋コンクリート造、地上5階・地下1階・塔屋4階建ての規模を持つ。和洋折衷の重厚な佇まいで、横浜港のシンボル「キングの塔」として長く県民に親しまれている。



堂々たる塔屋を頂く茶褐色の躯体で、潮の香りが漂う横浜港の側にずっしりと鎮座している。屋上の展望台からは大さん橋や赤レンガ倉庫、みなとみらい地区が一望できる。港町の歴史と現代が交差する絶好のロケーションだ。

ひととき目を引く中央の塔は「キングの塔」の愛称で親しまれている。かつて横浜港に入港する外国船の船員たちが、立ち並ぶ塔をトランプに見立てて呼んだことに由来するという。外壁には表面に細かな溝を刻んだ茶褐色の粗面タイルが張られている。幾何学的な装飾が織りなす「ライト様式」の外観だ。フランク・ロイド・ライト設計の旧帝国ホテル本館の大谷石を彷彿とさせる。日本趣味と洋風建築が調和する「キング」の威厳ある風貌に対し、外観から独特の柔らかさと温かみが伝わってくる。竣工当時の軒先を飾っていたテラコッタの装飾は現在屋上に展示され、往時の職人技に間近で触れることができる。

特筆すべきは、国指定重要文化財であるこの名建築が、単なる保存対象ではないことだ。現役の執務室として現在もフル稼働している。歴史的な意匠を損なわないよう、鉄骨耐震ブレースによる補強工事が施され、建物の安全性を確保している。館内の歴史展示室では、その補強ブレースを見学できるよう、一部をあえて露出させている。執務エリアの空調設備なども現代水準に更新された。更に、重要な儀式で使われた4階の大広間「正庁」も復原されている。近年の改修によって竣工当時の姿を令和に蘇らせるなど、歴史的価値の考証も重ねている。

建物の記憶と意匠を継承しながら、現在も日々の実務をこなす。港町を見守り続ける「キング」は、過去と未来をつなぐ豊かなナラティブ(物語)をまとい、今日も人々の営みを力強く支えている。



直線のみで構成されるアール・デコ装飾と、和風建築が見事に調和した1階ロビー(上)。現在も知事が来賓を接遇する際に使われる「旧貴賓室」(下)。極楽浄土に咲く幻の花とされる「宝相華(ほうそうげ)」のモチーフが、球形照明や階段手摺りのグリル、重厚な家具の細部にいたるまで随所にちりばめられている。竣工当時の姿を色濃く残す、圧倒的な格式の高さと精緻な職人技が輝く空間だ。